

五種混合（ジフテリア・百日せき・破傷風・
不活化ポリオ・ヒブ感染症）予防接種の説明書

不活化ワクチン
皮下注射
筋肉内注射

ジフテリアとは	ジフテリア菌の飛沫感染でおこります。1981年にDPTワクチンが導入され、現在では患者発生数は年間0人が続いています。症状は、高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死することもあります。発病2～3週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺をおこすこともあるので注意が必要です。
百日せきとは	百日せき菌の飛沫感染でおこります。百日せきは普通の風邪のような症状ではじまります。続いてせきがひどくなり、連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので笛を吹くような音がでます。乳幼児は咳で呼吸ができず、唇が青くなったり（チアノーゼ）、けいれんがおきることがあります。肺炎や脳症などの重い合併症をおこします。乳児では命をおとすこともあります。
破傷風とは	破傷風菌は人から人へ感染するのではなく、土の中にいる菌が傷口から人の体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素によって口が開かなくなったり、けいれんをおこすようになり、死に至ることもある病気です。患者の半数は自分でも気づかない程度の軽い傷が原因です。土中に菌がいるので、感染する機会は常にあります。
ポリオとは	ポリオは「小児マヒ」と呼ばれ、日本でも1960年代前半までは流行をくり返していましたが、予防接種の効果で現在は国内での自然感染は報告されていません。ポリオは、ポリオウイルスが口の中に入って、腸の中で繁殖することで感染します。増殖したウイルスは、便中に排泄され、この便を介してさらに他の人に感染します。成人が感染することもあります。乳幼児がかかることが多い病気です。ポリオウイルスに感染しても、多くの場合は明らかな症状はあらわれずに、一生抵抗力（終生免疫）が得られます。しかし、まれに腸管に入ったウイルスが血液を介して脳・脊髄へ感染が広まり、主に手や足に麻痺があらわれ、その麻痺が永久に残ることがあります。
ヒブ感染症とは	インフルエンザ菌の中でもb型（ヒブ）は、細菌性髄膜炎、敗血症、肺炎などの深刻な感染をおこす細菌です。ヒブによる細菌性髄膜炎のほとんどは5歳未満で発症し、生後4か月～1歳までの乳児が過半数を占めています。
接種対象年齢 接種回数・間隔	【1期】 （初回接種）生後2か月以上7歳6か月未満に、20日以上の間隔をおいて3回。 （追加接種）初回接種（3回）終了後、6か月以上の間隔をおいて1回。 【2期】 11歳以上13歳未満に、DT（ジフテリア・破傷風）二種混合ワクチンを1回。 回数が多いので注意しましょう。やむをえず間隔があいてしまっても、初めからやり直すことはせずに回数を守るようにしてください。
ワクチンの副反応	○接種箇所が赤くなったり、腫れたり、しこりができたり、痛みを感じたりすることがあります。 ○注射したところだけでなく、熱がでたり、刺激に反応しやすくなったりすることがあります。 ○極めてまれに、ショック、アナフィラキシー、脳症、けいれんなどが報告されています。 予防接種を受けたあと、副反応が起こった場合は医師の診察・治療を必ず受けてください。

受けることが できない人	○明らかに発熱のある人（37.5℃以上の場合） ○重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人 ○その日受ける予防接種に含まれる成分でアナフィラキシーを起こしたことがある人 ○医師が不適当と判断した人
予防接種を受けるに 際し、医師とよく相 談しなければ ならない人	○心臓病、肝臓病、腎臓病、血液の病気などの治療を受けている人 ○以前に予防接種を受けたとき、2日以内に発熱、発しん、じんましんなどアレルギーを思 わす異常がみられた人 ○今までにけいれんを起こしたことがある人 ○過去に免疫不全の診断がなされた人及び近親者に先天性免疫不全症の人がいる人 ○予防接種に含まれる成分にアレルギーがある人 ○発育で経過観察といわれている人
ワクチン接種後の 注意	○接種後 30 分間は、ショックやアナフィラキシーがおこる可能性がありますので、医師と すぐ連絡がとれるようにしておきましょう。 ○接種後に高熱やけいれんなどの異常が出現した場合は、速やかに医師の診察を受けてくだ さい。 ○接種後当日は過度な運動を控え、1 週間は体調の変化に注意しましょう。 ○接種部位は清潔に保ちましょう。接種当日の入浴は問題ありませんが、接種部位を強くこ することはやめましょう。 ○接種後、腫れが目立つときや機嫌が悪くなったときなどは医師にご相談ください。 ○このワクチンとほかのワクチンの同時接種を希望する場合は、医師にご相談ください。